

かり つかい ゆめ いせものがたり 狩の使 2：夢うつつ（『伊勢物語』）

『伊勢物語』は平安時代前期にその原型が成立した歌物語です。歌物語は、わ か ふく みじか ものがたり あつ いせものがたり みじか ものがたり 構成されています。『伊勢物語』の中の大半の物語の主人公は、在原業平（825-893）という実在の人物です。業平は平城天皇の孫にあたり、名高い歌人でした。また、『日本三代実録』に業平を評して「体貌閑麗」とあるように美男で、恋の噂が絶えなかったこともよく知られています。

テキストの「狩の使」は『伊勢物語』第69段の物語で、男（業平）と伊勢の斎宮との恋を描いています。斎宮は伊勢神宮の神に奉仕する役職で、皇族の未婚の女性が選ばれます。当然、恋愛は禁じられています。しかし、狩の使として伊勢の国を訪れた男は、心をこめて世話をしてくれる斎宮に恋をしてみせます。そして、こらえきれずに「あはむ」（会いましょう）と言ってしまうのですが、人目が多いのでなかなか会うことができません。

おぼろ月の出ている夜、男が眠れずにいると、部屋の外に人が立っています。それは斎宮でした。男は女を連れて部屋に入りますが、ほどなく女は帰ってしまいます。男は眠れぬ夜を過ごします。翌朝、女から歌が届きます。あれは夢だったのか現実だったのか。今夜こそ確かめたい、と男は思うのですが…

『伊勢物語』という作品名の由来については、様々な説がありますが、伊勢のくにぶたいとするこの「狩の使」の段から来ているという説が有力です。この段は『伊勢物語』の代表的な段の一つであると言えます。

ほんぶん しゅってん 本文の出典：

かたぎりよういち ふくいていすけ たかはししょうじ しみずよしこ こうちゆう やく たけとりものがたり いせものがたり
片桐洋一・福井貞助・高橋正治・清水好子 校注／訳『竹取物語 伊勢物語
やまものがたり へいちゆうものがたり しんべんにほんこてんぶんがくぜんしゅう しょうがくかん ねん
大和物語 平中物語』（新編日本古典文学全集12）小学館、1994年